

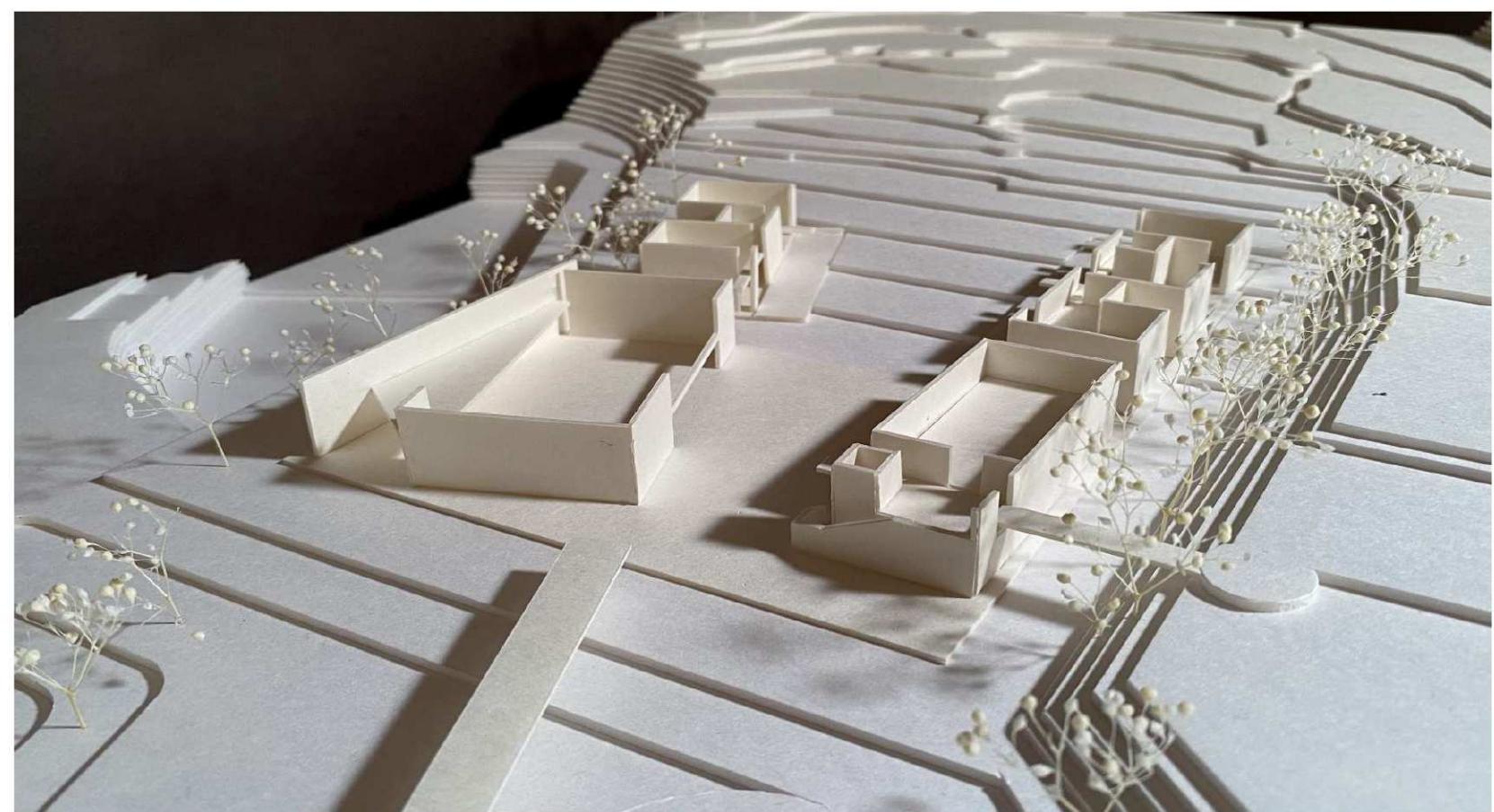
斜面と大屋根 が育む 里山のくらし



■特に重視する設計上の配慮事項

計画地や周辺地区はかつて棚田でした。斜面や坂道、階段…さらに棚田や段々畑などの傾斜地は、ヒトにとってとても魅力的な空間要素です。

このような緩やかな棚田状斜面の持っている潜在力を最大限引き出す計画を追求します。体験学習施設に斜面を復活させるとともに、創造の丘公園全体に「棚田状斜面や地面のレベル差を生かすこと」を基本姿勢とします。



■業務の実施方針

●暮らしお文化

筆から発展する多様な文化的広がりの理解を深めます。住民の創作活動が日常生活に根付き、新たな熊野町らしさを発信する場となることを目指します。

●来訪者との交流

町民や近隣都市居住者のニーズを的確に把握し、利用し易く何度も行きたくなる施設、観光で訪れた人々と町民の交流の場となる施設を目指します。

●自然を楽しむ

緩やかな勾配の斜面を生かし緑豊かな棚田苑と一体となる施設、木や石、土・紙などの自然素材による静かな佇まいの建築を目指します。

■設計チームの特徴と取り組み体制

図書館・博物館・コミュニティセンター等の公共施設や住宅の設計、まちづくりなどに実績のある事務所と住宅や公共施設に実績をもち山村で活動する若手アトリエ事務所によるJVを主体とするチームです。公共建築賞、景観賞等の受賞歴は両者で合計16回。

两者共自然豊かな農山村地域で多くの経験があります。また、工芸製作（陶芸・服飾・農業）を行なながら長年ギャラリーを運営してきました。工芸作家達との親しい繋がりを設計に生かします。ランドスケープ主任は、熊野町の観光交流拠点整備構想など複数の業務実績があり、地元の実情に精通しています。構造主任は混構造の実績が豊富、設備担当者は設備設計1級建築士など意欲的な技術者が揃っています。

JVチーム
管理技術者
総合主任
意匠主任
音響等アドバイザー
サポートスタッフ
構造主任
電気設備主任
機械設備主任
ランドスケープ主任

■品質・コスト・工程を管理する手法

これまで様々な活動を行ってきた町民の利用しやすいうこと、施設完成後の利用者や活動者を増やす事などを目的としたワークショップを開催し、ニーズを的確に把握し業務を推進します。

①対話によるニーズの把握

町・関係団体・町民の要望を整理し、課題の明確化など対話を重ね理解を深めます

②確認

各段階での要望等を正確に記録し、条件を明確化し要求事項を設計図に反映します

③比較検討

複数案の比較検討により妥当性を確認します

④根拠

各種仕様の採否については定量的データに基づいて実効性の高い計画を行います

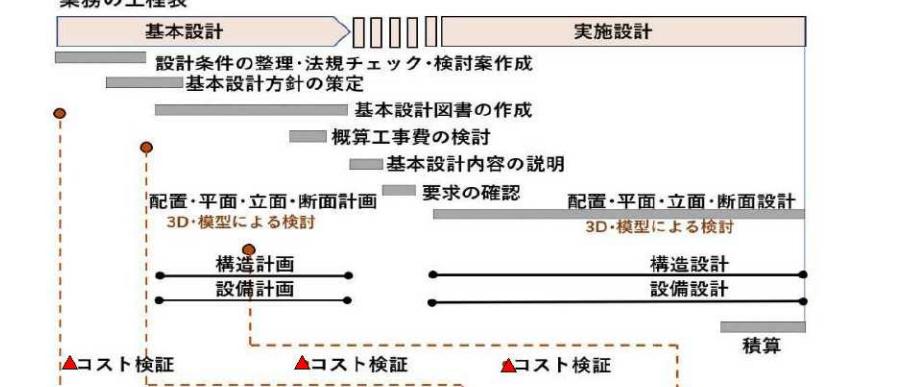
⑤わかりやすい表現

C Gや模型を用いて計画に対する相互理解を深めます

⑥費用対効果

設計の各段階で費用対効果を精査します

業務の工程表



第1回ワークショップ

設計者の意図をくみながら現地を確認
「きもちづくり」

第2回ワークショップ

町民の意見を踏まえ計画案の吟味
「かたちづくり」

第3回ワークショップ

利用・運営の新たな発展と展開を考える

(2)施設機能、経済性・実現性について

■施設機能

●配置計画－回廊が結ぶ分棟型配置

中庭を囲む中央棟、工房棟による分棟型配置です。敷地の中心部に中庭と体験ホール、ハの字工房群を配置し屋外の回廊で結びます。

●中庭－棚田苑につながる緩斜面

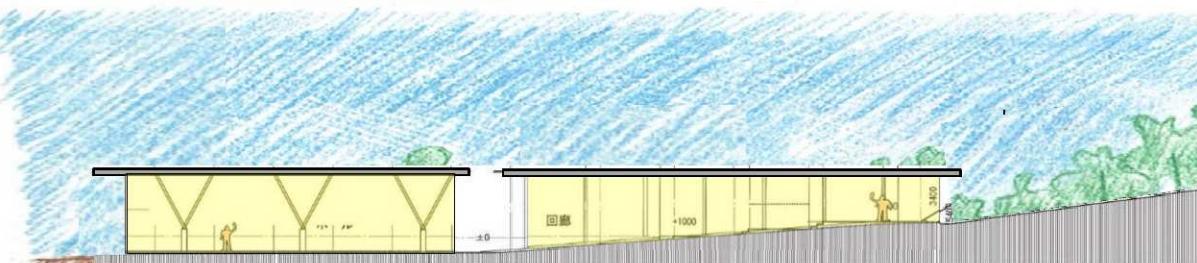
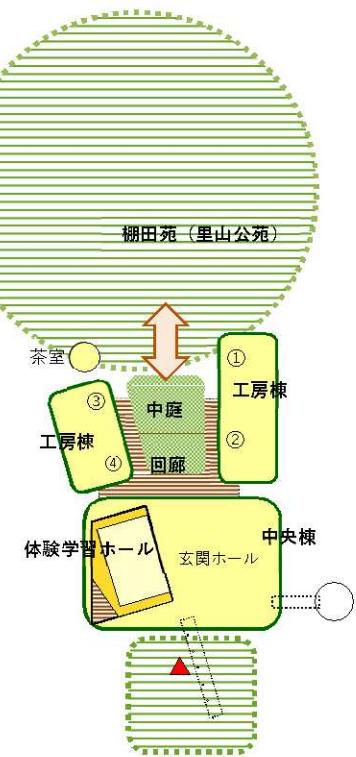
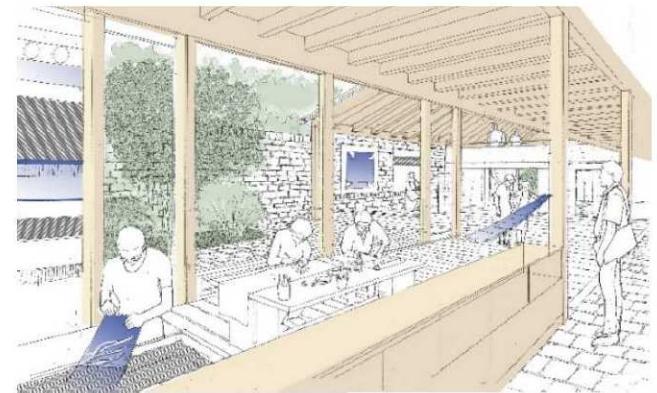
緩やかなレベル差を持ち奥の棚田苑に連続します。イベント時には可動式テントを架け、ホールとの一体利用が可能です。テントは音響効果にも配慮した性能を持ち、大音量の野外コンサートの開催も視野に入れます。

●体験学習ホール－玄関や中庭と繋がる

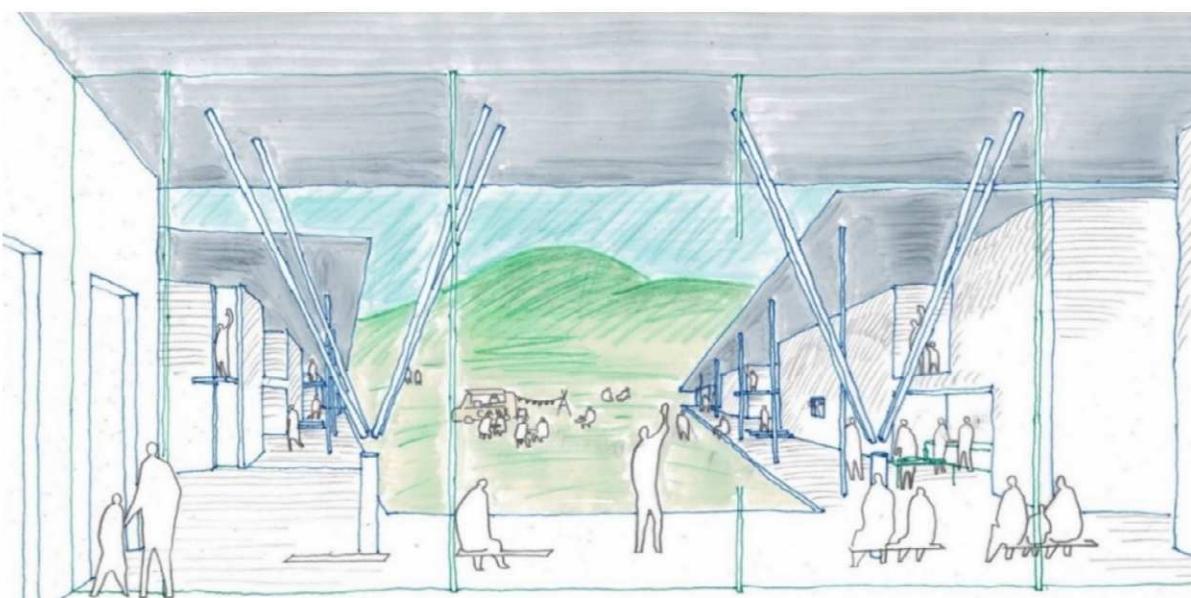
スクリーンや引き戸など間仕切りを開ければ、玄関ホールや中庭と一緒に利用の出来る開放的な空間です。3方を2階ギャラリーが囲む構成とし、2階観客席や展望室となります。

●工房棟－親しみ易い住宅スケール

隣室工房とのレベル差をいかした中2階、WCや倉庫などの付属室と共にアルコートや光庭を持つ親しみ易い構成とします。施設全体に深い庇をかけ屋外作業に対応します。



ユニバーサルデザインに配慮しながら緩斜面を活かす 中庭の断面構成



●2階－入り口に展望レストラン

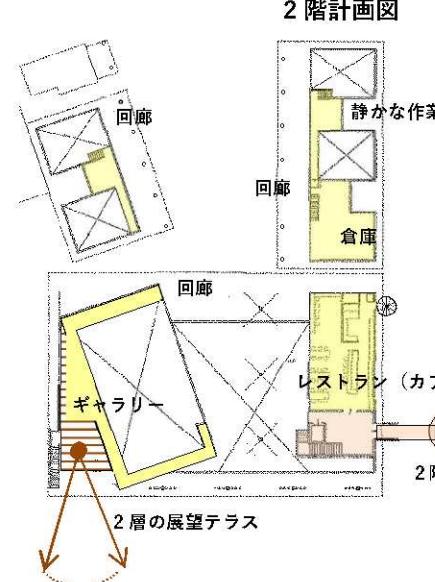
2階入り口に面してレストランを配置します。レストランからは麓の景色・内部エントランスロビー・中庭も見渡せます。様々な視点・高さを用意して「見る・見られる」の関係を生かし、創る行為との連携をはかります。

●工房棟の中二階

作品置き場や静かな作業空間となります。下の階は控室やWCなどサポート空間です。

面積表

	1階	2階	計
工房棟(大)	176	88	264
同上回廊(屋外)	78	0	78
小計	254	88	342
工房棟(小)	112	25	137
同上回廊(屋外)	48	0	48
小計	160	25	185
中央棟	709	186	895
同上回廊(屋外)	60	0	60
小計	769	186	955
公園倉庫	40	0	40
茶室	15	0	15
計	1,238	299	1,537
(含屋外回廊)	186		



■経済性・実現性

●工夫を重ねるコスト削減

設計の初期段階からコストチェックを行います。また、調達しやすい材料や易しい工法を採用し、コストダウンを図ります。自然エネルギーの活用、省エネ設備機器の採用などランニングコストの削減を図ります。W造とS造の特性を慎重に吟味し、構造を決定します。地震時の横力をRC壁で負担し柱は垂直力のみ負担する、という混構造についても検討し、構造コストの縮減を図ります。(象徴的機能参照)

●乾燥材の確保

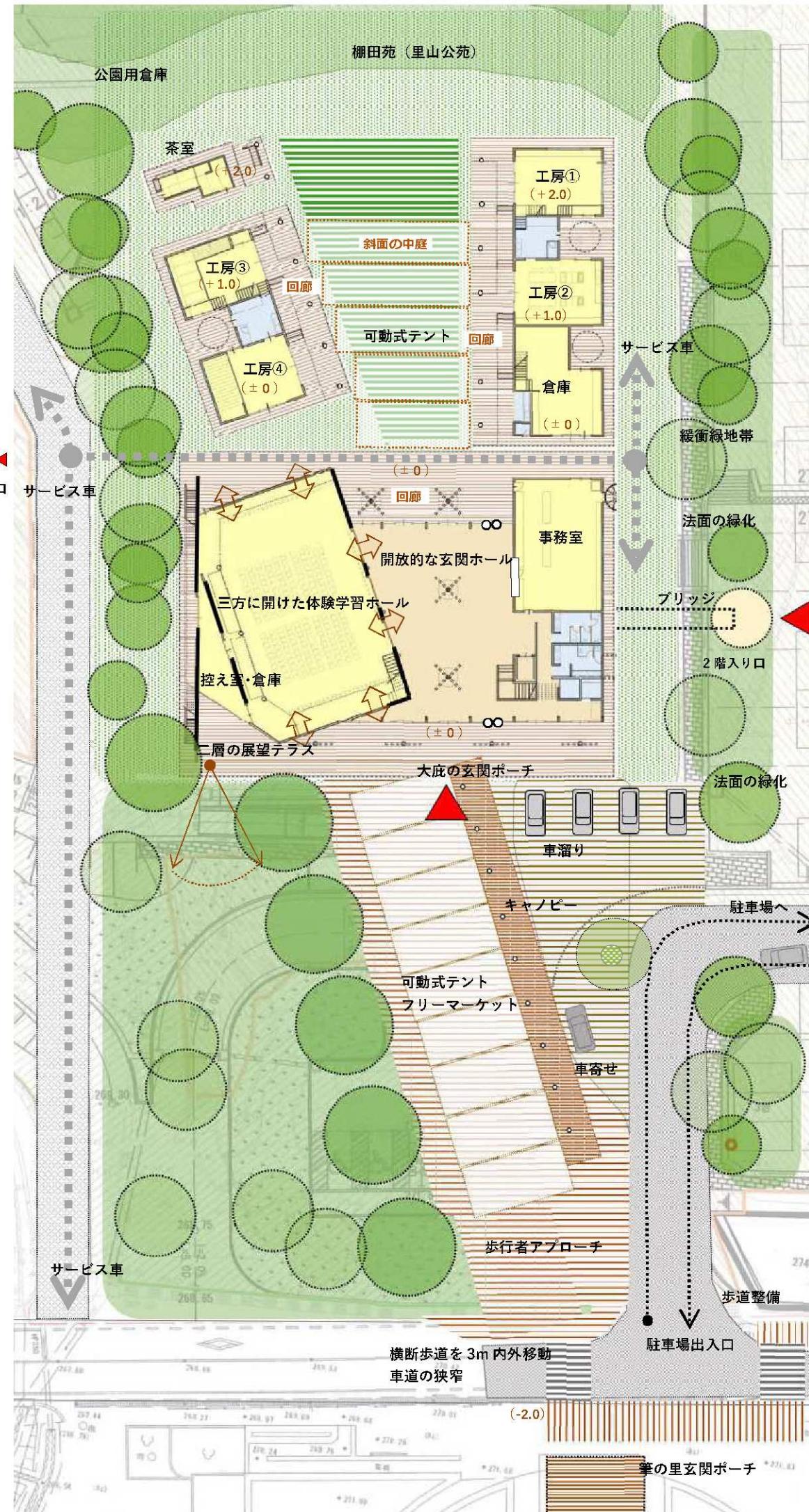
令和6年度の着工に向けて、前もって伐採した町産材を十分に乾燥させることが必要です。基本設計終了時頃から伐採計画を立て、乾燥材の質を確保することを推奨します。

●建築による省エネルギー計画

- 自然光を取り入れあかるい空間を作ります。
- 室内の高低差を利用して温度差換気を行います。
- 中間期は地形を活かした自然通風を積極的に利用。
- 夏季は大屋根の庇で直射日光を抑え、冬季は南面からの日射熱を取得して冷暖房エネルギーを削減します。

●設備による省エネルギー計画

- 空調設備は電気式個別パッケージエアコンを採用。
- 大空間は床吹出し空調を採用。
- LED、センサー制御など照明エネルギーを削減。
- 簡易なエネルギー管理システムを導入し、施設全体のエネルギー使用状況を把握し省エネルギーや維持管理業務の効率化を図ります。



(3)連携機能、象徴的機能について

■連携機能

●熊野の日常性

筆の里工房は、アトリエの機能を体験交流施設に移し、専門家や観光客の興味に耐えられる質の高い展示をめざします。体験学習施設は町民や近隣居住者が主な利用者です。「触ることができる、試すことができる、工夫することができる」など多世代の来訪者に親しみ易い「くまのの日常性」を楽しむ施設を目指します。

●前面道路に面した交流ゾーン

筆の里工房と体験交流施設を結ぶロータリー空間は、**交流ゾーン**として整備します。歩きながら奥の棚田苑を予感させる構成とし、植栽や舗装、照明や給排水設備など充実させ、可動式テントを架けます。工房で製作した品物や持ち寄った品々、食品などを並べることのできるフリーマーケット空間です。

●安全な進入路

交通量の多い前面道路から**駐車場への出入口**は1か所に限定し、歩行者と車の動線を分離します。前面道路の一部に歩道を設け、車道の狭窄や舗装の特徴づけなど注意喚起を工夫し、歩行者の安全性を高めます。

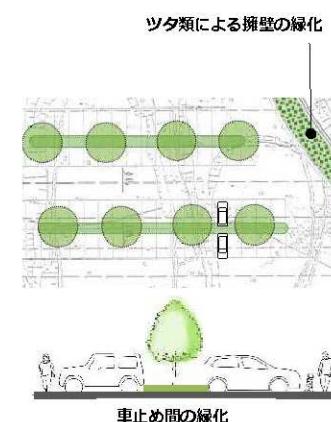
●便利なサービス路

各工房や事務室へのサービス路として、調整池沿いや棚田苑側からのアクセスを確保します。

●駐車場の緑化

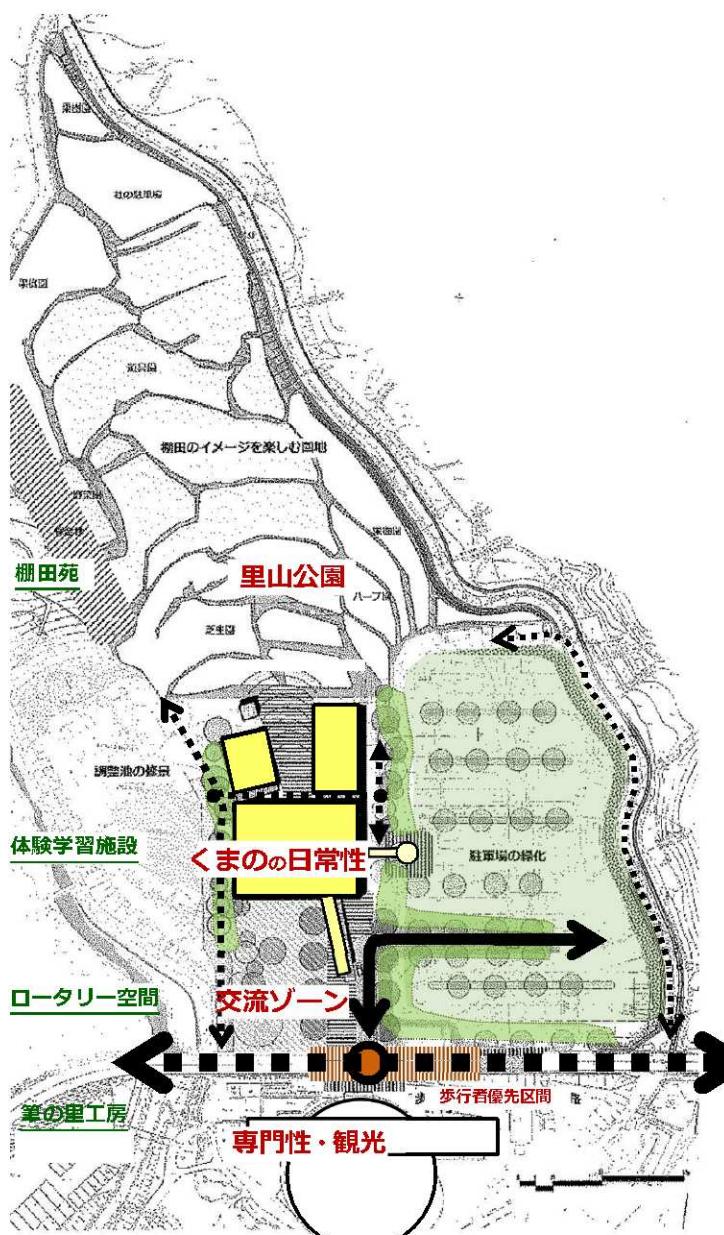
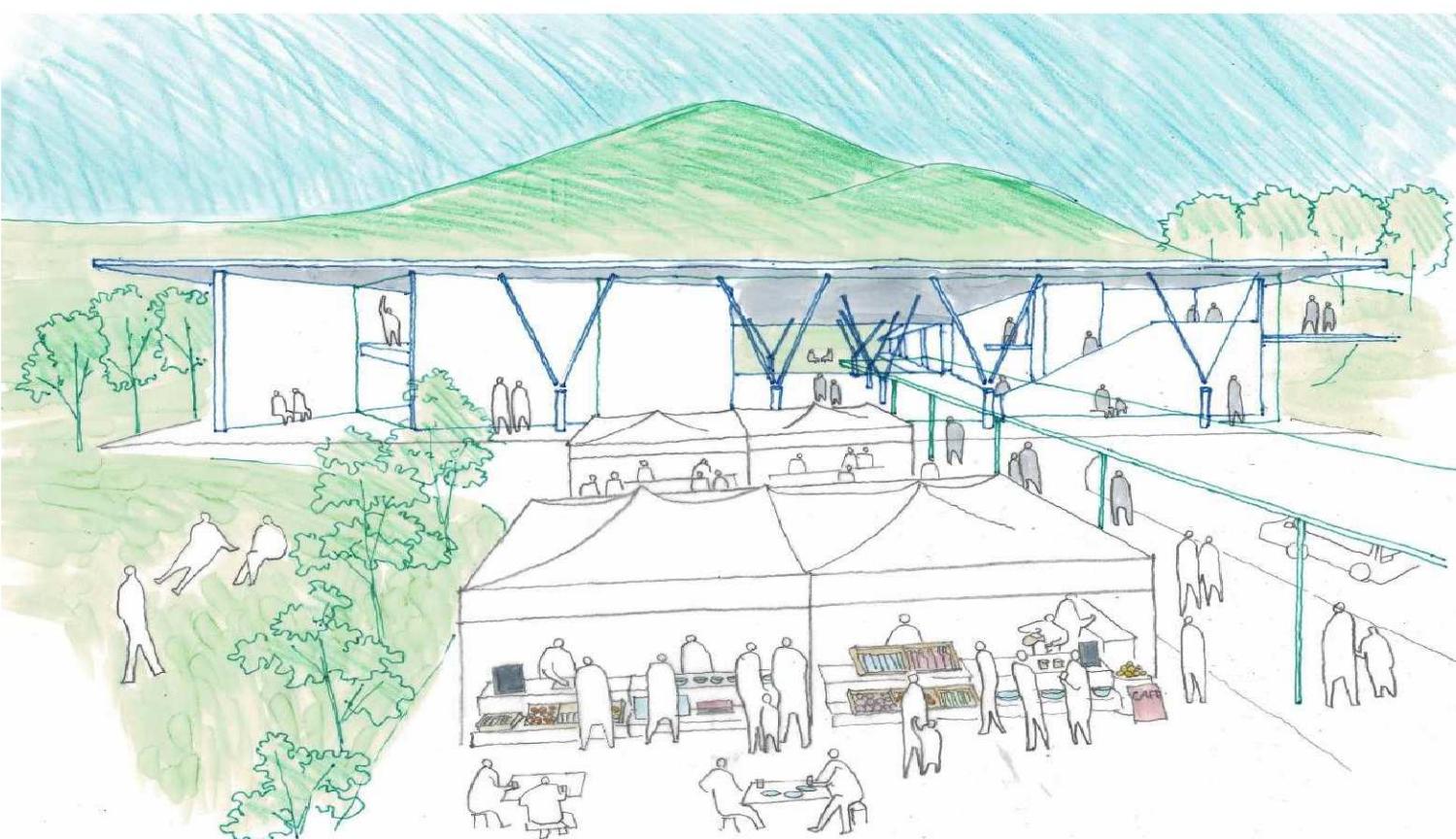
駐車場は自然公園にふさわしく木立の中に駐車する「森の駐車場」とします。擁壁面のツタ類、駐車枠の一部の植栽、背後の車止めとの間のグラウンドカバーなどによる緑化など駐車台数を確保しながら緑化を行います。

体験学習施設と駐車場や調整池との間は緩衝緑地帯とします。



●法面の緑化

擁壁類は極力避け自然な印象の法面とし、積極的に緑化します。

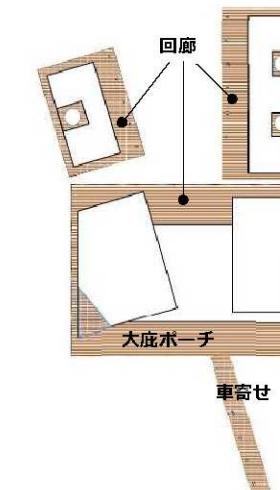


■象徴的機能

筆の里創造の丘公苑を特徴づける緩やかな斜面を中庭や室内に取り込み、公苑全体に高低差を生かすこと…がこの施設の基本コンセプトです。そして、レベル差のある独立性の高い工房群をまとめる大屋根を提案します。床の高低差と大屋根を組み合わせ、「豊かで落ち着いた存在感を創り出すこと」が大きなテーマと考えています。

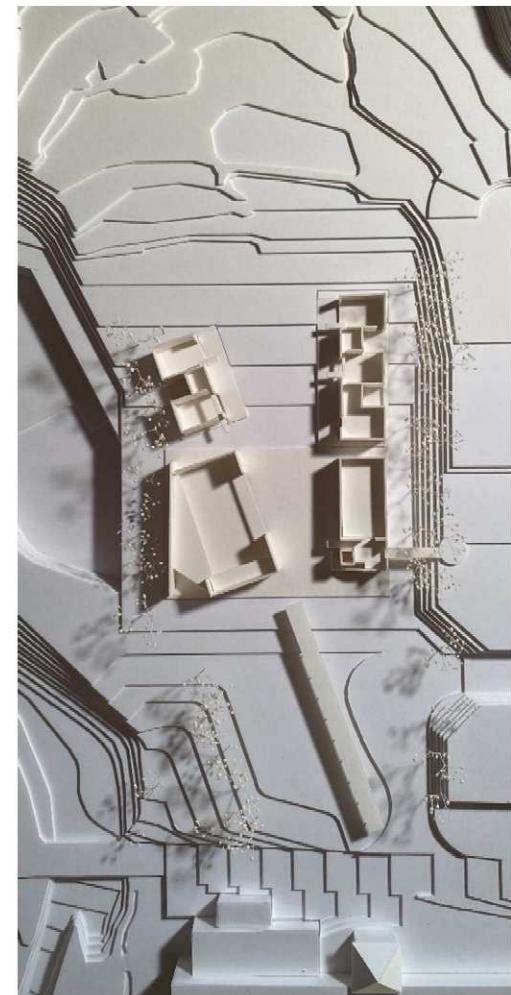
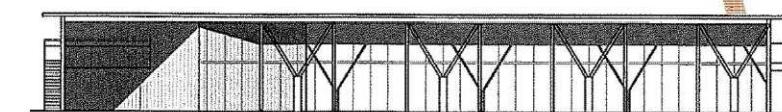
●緩やかな斜面と水平線の対比

緩やかな斜面や坂道、階段などで地面を構成しながら、さらに際立たせる水平線を軒先や天井面として効果的に使用します。



●庇下の半屋外空間

直射日光や降雨から利用者を守る深い庇は、半屋外的印象深い快適な空間です。屋外での作業や憩いの空間として各所に用意し、体験学習施設を特徴づけます。



●自然系素材

工房群では自然素材を小さな技術で加工する…という作業が行われます。建物の床や壁、天井や家具も木や土などの自然素材で構成することによって、自然の恵みを享受する施設としての印象を深めます。

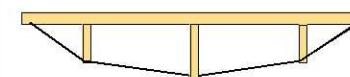
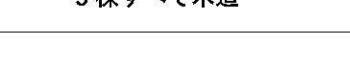
●構造形式

素材の選択とともに、構造のデザインは建築の印象を支える大きな要素です。各棟の規模・形式を考慮し、適材適所で主体構造を選定します。

工房棟は比較的小規模な建物であり、一般在来工法による木造の採用が適しています。梁などの構造体をあらわす(見せる)工法を追求し、流通木材を利用した建築のしやすさ、コストの低減を考慮して設計します。

中央棟は開放性のある建物であり、RC+木造又は鉄骨造の採用が考えられます。鉄骨造は空間の広さを感じられる構造形式であり、内装材による木質化を進めることにより、建物全体の意匠性の統一感を重視した設計を行っています。

木材、鉄材共に価格不安定状況が続いている。基本設計時点の厳密なコスト比較により、構造を決定します。

3棟すべて木造	中央棟のみ鉄骨造
 <p>水平材使用の張弦梁</p>	 <p>木造</p>
 <p>フィンガー柱と水平梁</p>	 <p>木造</p>
 <p>木質仕上げ材</p>	 <p>木造</p>